

黒人研究の会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.76 (September 30, 2013)

第76号 2013年9月30日

例会発表要旨

4月例会 2013年4月27日 キャンパスプラザ京都

音楽からみるグローバリゼーション下のジャマイカにおける

『ラスタらしさ』の変容

神本 秀爾

グローバリゼーションが進展したことで、人々はローカルな伝統や価値観から物理的にも精神的にも解放されたかに見えた。しかし、その一方で、ローカルな伝統や価値が装いも新たに人々を魅了していることもまた事実である。本発表が対象とするラスタファーライは、植民地下のジャマイカにおいて1930年代以降、徐々に創造されてきた新たな生き方であるが、いまではラスタファーライは世界各地に越境し、実践者ラスタの多国籍化・多人種化も進んでいる。つまり、ラスタファーライは現在も絶えざる再編の途上に位置しているのである。

4月例会の発表では、ジャマイカのポピュラー音楽レゲエの分析を通して、21世紀初頭のジャマイカにおけるラスタらしさの特徴と多様性を、ナショナリズムとの関係に着目して検討することを試みた。発表の前半では、レゲエの展開史を確認し、1990年代中期以降のレゲエ・シーンにおいて、1970年代以来にラスタの活躍が目立つようになっていることを確認した。発表の後半では、ラスタの人気レゲエ・ミュージシャンである Munga Honorable の”Bad From Mi Born”、Tarrus Riley の”Protect the People”、Damian Marley が参加している”On a Mission”を対象として、作品中に見られるラスタファーライの表象について分析を加えた。

そのうえで、本発表では、ラスタたちのアイデンティティの一部に「ジャマイカ人であること」は避けがたく浸透しており、しばしばその「ジャマイカ人らしさ」が肯定的にとらえられるようになってきていることを指摘し、これらの変化はグローバリゼーション下で先鋭化しつつあるジャマイカ・ナショナリズムと密接な関係があると結論づけた。

① 『ジョヴァンニの部屋』における同性愛問題と人種問題

丹野 由貴

ジェームズ・ボールドウィンの『ジョヴァンニの部屋』(1956)には、同性愛に苦悩するアメリカ白人青年の心理が描かれている。当時、パリを舞台にした、白人に限定された登場人物たちの物語に対して、「なぜ黒人の経験や苦悩に触れていないのか」との議論が持ち上がったことは注目に値する。この問いを考察することは、すなわち、ボールドウィンが人生を通して背負った重荷(黒人と同性愛者への偏見)を、彼自身がいかにとらえていたかを知る有効な手がかりとなるだろう。彼が描いた「白人の苦悩」に焦点をあてると、理想化された白人像が浮きぼりとなり、同時に、その背後に被抑圧者の存在が認められる。主人公デイヴィッドはジョヴァンニ(男性)と愛し合うが、一方で自身に内在する同性愛性と同性愛嫌悪の相反する感情に悶え苦しむ。彼は異性愛の道を選ぶことでその苦悩を解消しようとする。彼の行為からみえてくるのは、同性愛が伝統的白人男性の「男らしさ」を汚すものとみなす価値基準である。色彩としての「白」は「良い/清潔」などを含意し、さらにその対極にある「黒」は「悪い/汚さ」等に関連づけられ、そうした社会的認知が人種偏見や同性愛偏見の形象化に利用された。さらに言えることは、対極の存在を認識することで自らの存在価値を見いだそうとする白人側の手続きは、排除される者を自動的に生産し、他方で、白人性とは虚無の存在でしかないと自ら認識することに帰着する。デイヴィッドの苦悩の背景にはこうした構造がみて取れる。ねじれた彼のアイデンティティは、社会階層の底辺でもがくジョヴァンニを絶望の淵へ押しやり、悲劇の結末を導く。ジョヴァンニにみる労働者階級の移民が、顧みられずに排除の対象となる社会的枠組みは、アメリカにおける「行き場を失った」黒人像と重ねられるだろう。

② 韓国英語英文学会におけるシンポジウム

— 「アジア的視点による黒人研究」報告

木内 徹

要旨は第75号「会員からの投稿」欄に掲載されているので省略。

Kato Tsunehiko

Black Studies in Japan: A Brief History of Japan Black Studies Association since 1954 with its Prehistory

The Black studies in Japan in the twentieth century grew up in the changing Japanese soil. In the pre-war days, when Japan took the racialized imperialistic course to create the Asian Co-prosperity sphere in opposition to the US open-door policy to China, the mainstream of black studies in Japan were politically exploited to justify the national policy. In the post-war period, however, when Japan was integrated into the US-led free and democratic regime against the Socialist one under the Cold War, JBSA was established in 1954 by the people who succeeded the liberal-Marxist trend in black studies in pre-war days and participated in the cultural movement for democratization of Japanese society and culture from below. They believed that the much advocated American democracy was problematic as long as African-Americans were treated as second-class citizens in the South. The politically turbulent period from the middle of the 1950s through the 1960s in Japan was in reality the transition period of Japanese society where the old feudal values were challenged by the new. JBSA members studied the struggles in Africa as well as in the US of black people for freedom because their struggles greatly encouraged their efforts for such social changes. And from the 1970s and the 1980s, when the agenda of women liberation was on the table in Japan, JBSA focused upon not only the black and other minority women writers in America but also those writers in Africa because their works greatly encouraged Japanese women seriously concerned with the task. It was also during the 1980s that the study of African-American women writers began to diversify into the study of black women writers from the Caribbean and then into the Caribbean studies, and then into the Black British studies from the late 1990s. And this process was further promoted by the increasing opportunities for international academic exchanges in which more and more JBSA scholars went abroad and in turn invited black writers and scholars to Japan.

ヒューストン・ヒップホップ研究 — DJ スクリューからビヨンセまで

井澤 知也／赤尾 千波

1970年代ニューヨークで発生したといわれるヒップホップ・ミュージック（単にヒップホップとも言う）は、現在アメリカ音楽業界において確固たる地位を確立している。その一方、全米に広がるにつれて、西海岸系、中西部系のヒップホップが現れ、

多様化したといえる。

本発表では、現在のテキサス州ヒューストンのヒップホップ（以下、ヒューストン・ヒップホップ）に注目し、歌詞やミュージック・ビデオの特徴について紹介する。

具体的には、ヒューストンで活躍するラッパーTreaTha Truthが2012年8月に発表した“Bitch I’m From Texas”のミュージック・ビデオを視聴し、歌詞と映像におけるヒューストン・ヒップホップ独自の要素を検証する。さらに、R&BシンガーBeyoncéが2013年3月に発表した楽曲“Bow Down / I Been On”も検証する。この作品はR&Bの曲であるが、前述したヒューストン・ヒップホップの特徴を有する。ヒップホップ・アーティストではないBeyoncéが、どのようにヒューストン・ヒップホップの技法やテーマを取り入れているかを検討する。

会員からの投稿

キング牧師の「夢」だけを称賛するのは誤り（2013. 8. 27）

須田 稔

◇1963年8月28日の「仕事と自由を求めるワシントン大行進」。25万人を前にしたマーティン・ルーサー・キング牧師の演説は「私には夢がある」として広く知られる。リンカン大統領の「奴隷解放令」から100年後も、人種差別が根絶からほど遠いという現実を批判、建国の理念である「生命、自由、幸福の追求」という基本的人権の空文化を厳しく告発し、人種平等と個人の尊厳がいつの日か必ず実現する夢を力強く語った。「黒人公民権運動」の不世出の指導者であった。

今夏は50周年。記念の行動が24日から28日まで企画された。24日にリンカン記念堂前に数万人が結集した集会を26日付『毎日』と『赤旗』は、かなり大きく写真付きの記事にした。『毎日』は「差別への異議 多様化」「数万人 権利擁護訴え」「ゲイ、ヒスパニック・・・貧富の差も」の見出し。加えて、貧困率は黒人が白人の約3倍などの現状を調査機関の発表で紹介した。『赤旗』は「人種差別撤廃を」数万人「キング牧師の夢実現よびかけ」の見出し。

◇ 殴打・刺傷・爆破・逮捕・投獄、脅迫・盗聴などさまざまな暴力を差別主義者やFBIから受けながらも、非暴力直接大衆行動を堅忍不拔に実践した人が訴える夢。だからこそ、この日本の若者の精神を深く震撼させた。

だが、キング牧師は人種差別主義とだけ闘ったのではない。これと物質主義・金権主義ないし貧困、および軍国主義＝軍事至上主義という三巨悪と闘い、価値革命を唱えたのだ。

1967年4月4日、ニューヨークのリヴァサイド教会で「ヴェトナムを超えて」という反戦演説をおこなった。公民権運動の同志で彼に警告する人たちもいた。大新聞・雑誌は「北ヴェトナムの代弁者」、「公民権運動に専念せよ」などとキングを非難。連邦捜査局FBIのフーヴァー長官は、ジョンソン大統領宛て私信で、「キングの最近の言動から、彼が、わが国を転覆しようと謀っている勢力の手先であることは明らかで

す」と書き、キングを警戒するよう助言したのだ。「共産主義者」呼ばわりは早くからあった。ブッシュなら「テロリスト」と罵っただろう。

◇ キングは、この憂国の演説で、「今日の世界で暴力の最大の調達人である、私自身の政府」、「社会の向上によりも軍事予算に莫大な金額を費消する国は精神的死滅に近づいているのです」、「この戦争は道徳的に誤りで、革命・自由・民主主義のイメージでなく、暴力と軍国主義のイメージに堕しています」、と悲憤した。暴力と頽廢の権力者を怒った。

反革命＝反動勢力の旗頭になっているのですと政府を指弾し、戦争は貧窮人民の敵である、ヴェトナム兵を1人殺害するのに50万ドルを使いアメリカの貧窮人民に年間53ドルしか使わないジョンソン政権の「貧困退治計画」の道義的頽廢を糾弾した。それ故に、ちょうど1年後の68年4月4日に暗殺された。

オバマと違って、彼のノーベル平和賞は理不尽な権力への「良心からの怒り」に対する敬意だ。日本国憲法を活かす闘いへの激励だ。

海外在住レポート@ハノイ、ベトナム

峯 真依子

2012年9月より九州大学の大学院を中退して、ベトナムのハノイにあるヴィエットニャット外国語工科大学の外国語学部で、英語学科と日本語学科の両方の外国人講師として勤務した。毎朝トヨタの車がお迎えに参りますという話だったが、話が違う！スタッフが毎朝バイクで迎えに来てくれる。授業は1限目が7時半より始まる。朝霧と大渋滞の排気ガスのたちこめる旧市街、ホアンキエム湖の柳が揺れている。そのそばを駆け抜け、バイクでひたすら街を疾走する。

大学に着くと、路面店のフォーで同僚たちと朝食をすませ、それから授業。元気いっぱい、自分たちが美しいことを知っており、男子学生にたかっお茶をおごらせ、わがままで好き勝手ばかり、でも勉強は凄まじくできるという女学生を相手に、時折エネルギーを枯渇させながら授業を行う（ノートを取るのが面倒なのか自慢なのかiPhoneの動画で授業を録画していた彼女たち！）。不定期だが頻繁に、アメリカと日本を中心とした海外の学長らによる視察と夕食会での通訳及び接待業務、祝日には学内のイベント、夜は自室で黒人研究というハードながら毎日が充実していた。

10月に、ホーチミンの女子大生が反体制のビラを卷いたという事件が起こる。反政府運動で捕まると懲役10年以上が相場のこの国で、彼女の支援デモがあれば参加したいと思ったことが事の発端だった。金曜の夕方、帰宅前に大学で事件について検索し、月曜の朝出勤して再びパソコンを開くと私のパソコンだけネットが繋がらない。警察のマークが画面に出てくるだけだ。検閲というものは、自分で体験してみないと恐怖はわからない。メールもできない。「1企業1スパイ」という政府の方針も、やっとりアリティを持って理解できるようになる。また、ビザ等の手続きに関して、役人から賄賂を再三求められる。この国の現実を知るにつれて、過去のアメリカの外交政策から半信半疑になっていた民主主義の価値を、今や最後の砦のように信じ、そこにすがっている自分に気づくのだった。

結局、ネット規制を受けると、事実上、授業の準備も研究もできず、代わりに日本から本を送ってもらっても、検閲されて日本に戻ってしまう。今年3月に帰国して、東京の大学で非常勤として働くことにした。帰国の日、その自由奔放さで一目置かれた存在の学生が、早口で「ここは私たちでも生きにくい。父はヨーロッパに亡命したの」と言う。長いこと一緒にいたのに、初めて聞く話に驚く。「あなたも行くの?」と尋ねたが、彼女は「わからない」という。私は、「あなた程語学のセンスがあるなら行くべきだわ!」とお節介にもおそらく勘違いな助言をした。すると彼女は小さく手をふると私から離れ、他の学生の輪に入り遠巻きにこちらを見ていた。日本に帰ってしばらくして、突然、彼女の真意について腑に落ちる瞬間があった。言葉一つで運命が大きく変わってしまう場所で、彼女の「わからない」は、身を守るために大事なことは言わないでおく、という意味だったと気がついた。

ある日、ハノイ郊外にある別キャンパスでの仕事の帰りに田舎道で見た、燃えるような大きな夕日も、車のタイヤで巻き上がった砂埃も、全部夢だったのではないかと思うことが時々ある。しかし、週に一度は元同僚や元学生から連絡がくる。職場の人間関係がどうしたとか、新学期が始まったとか他愛もない話だが、それで現実だったとわかりホッとする。年内に数人が日本に留学に来るとのこと。あまりにも彼らと深く関わってしまった。ベトナムでの経験は、色々な思いがよぎってずっと言葉にならなかった。今回、きっかけを与えて下さった黒人研究会の先生方にこの場をお借りして感謝申し上げたい。

法と人権 — 誰のもの?

源 邦彦

アメリカでの大学院生活も一年が過ぎようとしている。渡米する前から黒人社会が抱える諸問題については幾分の知識は備えていたが、アフリカ系奴隷子孫の大多数を取り巻く人種差別の根深さにあらためて驚かされている。法の下での平等というレトリックによって特定集団の価値基準を強いられるマイノリティー集団は合法的に人権を剥奪される。その一例が国内の人種別人口比率を著しく上回る黒人収監者数である。奴隷制時代から今日に至るまで、特定集団が築いた民主主義というイデオロギー装置、資本主義、人種主義が結託し黒人社会を苦しめる。さらに地域の人々の生活に目を向けると、黒人を含むマイノリティー集団に対する違法行為までもが明るみになる。たとえば裁判所で、ある両親に対し規定の手続きによることなく判事やソーシャルワーカーが親権を剥奪する方向へと話を進める。その先にあるのは里親制度。子供は合法的かつ正当な理由もなく両親から引き離され、里子一人あたり月額五千ドル相当が政府から支給される里親の手に渡る。この制度下で育てられた子供たちは非行に走り、犯罪に手を染め、また精神疾患を患うことが多い。巧妙に再生産される人種主義、いったいいつになったら終わるのであろうか。

小泉 弥生

今回由緒ある『黒人研究会』から海外在住会員として日常のことについて一筆を寄せるようにとのお言葉を頂き、非常に光栄に存じております。簡単に自己紹介をさせていただきます。私は米国北東部ニューヨーク州の中部にあるイサカ(Ithaca)という町で、コーネル大学の博士課程に在籍しております。23歳まで日本で育ち、大学も東京で出たのですが、1996年に米国に留学に来て、そのまま紆余曲折を経てこちらにおります。2001年にワシントンDCにあるHBCU(historically black colleges and universities)であるハワード大学で哲学の修士号をとりました。その後こちらコーネルに来て、数年間大学図書館で働き、その後同大学のアジア研究の博士課程(日本)に所属するようになりましたが、個人的には日本に限らず地球上のさまざまな問題(経済的・環境的・人種的)に憤っています。まあ、大体他の人文系の大学院生と同じです。黒人研究会の皆様にはその辺の気持ちをわかっていただけではないかと思っています。

2000年にハワード大学病院で生まれた息子がいます。この子の父親はカメルーン出身ですが、私一人で育てています。今13歳で、今年の秋9月からミドルスクール(中学校)の最終学年になります。彼のことにからめて、すこし米国の刑事司法制度(Criminal Justice System)について書いてみようかと思っています。

イサカはコーネル大学やイサカ大学もある大学町ということで、全米でも住みやすい町ということで最近もトップ10にまで入っている町です。¹政治的には「ヒッピー」のイメージで、リベラル・革新的な要素が多いというふうにイサカの多くの住人たちは自負しているようです。“Five Miles Surrounded by Reality”(「現実に囲まれた5平方マイル」)などというキャッチフレーズ——つまり、現実の米国はレッドネック(反動主義者)が多いが、イサカの5平方マイルはプログレッシブだ、と——にそのメンタリティが象徴されています。このフレーズは車のバンパースティッカーになっていたり、Tシャツにプリントされていたりします。風光明媚で、滝や湖が多く、有機栽培の農場も周りに多くあり、ファーマーズ・マーケットがとても盛んです。大学のおかげで国際的・人種的にも多様な人口構成になっています。

と、確かに、特に周囲の町と比較することにおいてはそのように言えないこともなく、素敵な町であることに変わりはないのですが、でも実際に10年も肌の色の黒い息子とシングルマザーとして住んでいますと、こういったことすべては比較の問題で、実際にはこの程度の「革新性」に誇りを持っているようでは将来が少々思いやられると思います。たとえば、2012年の大統領選挙のときに息子の中学校でモック・エレクトション(仮想選挙)をしたのですが、そのときの生徒の投票結果は実際の全国の投票結果とまあ大体同じで、共和党と民主党が大体半々でした。共和党に投票する生徒がそれほど多いということ自体、ワシントンDCに住んでいた私にはショックだったのですが、もっと驚いたのはその他の独立政党、例えば、グリーンパーティに投票したのは私の息子1人を除いて誰もいなかったことです。中学生の半数が共和党に投票するのは、家族やテレビの影響の反映でしょうから、イサカの政治的状況がある意味単純によくわかる結果となっています。

共和党へ投票数が全体の半分あったというこの結果は、私がワシントンDCのハワード大学で経験した2000年の選挙とはかけ離れた状況です。最近ハワード大学近辺

も *gentrification* (高級住宅化) で私が住んでいた 13 年前と状況はかなり変わってきていますが、もともと黒人が多く、「チョコレート・シティ」と呼ばれ、政治的にもリベラル、又は革新的でした。2000 年の大統領選では、当時民主党アル・ゴア対共和党ジョージ・W・ブッシュ戦で結果の決定のため、最高裁までケースが持ち込まれた時住んでいた近所の家のほとんどがゴア、もしくはインデペンデントのラルフ・ネイダーのポスターを玄関や窓に貼り、フロリダでの状況に関して憤っていました。共和党のブッシュのものなど私のハワード周辺の行動範囲の限り、皆無でした。このような状況でしたから、2001 年にイサカに引っ越してきたときにまずびっくりしたことは、1 年前の選挙の名残がみえるバンパースティックカーに、ブッシュの名をかなり見かけたことです。ハワードの近辺ではまずお目にかからない代物でしたので、「あ、やっぱり本当にいるんだ、共和党に投票する人・・・」と、まるで異惑星に降り立ったような気分でした。

イサカでは、私たちも生活しているマイノリティの割合が多い低所得者用の住宅プロジェクトは、町のダウントウンと、また、”*the wrong side of the track*” (「線路の間違った側」)、もしくは平行して流れている水路の西側に大体点在しています。興味深いことに、コーネル大学教授の多くは、この「間違った側」からは反対側の、町の北東に位置する丘の上のキャンパスの北側に住んでおり、そこにはこういったプロジェクトは私が知る限り存在しません。私と息子は線路のこの「間違った側」のプロジェクトのひとつに 10 年ほど住んでいます。私たちの隣人のなかには、ニューヨークシティから特にここ数年越してきたアフリカ系アメリカ人の方が多いです。我が家の近隣はイサカでも黒人の密度が高い方だと思います。まあ、私たちが住んでいるところは、プロジェクトといっても大都市のものよりは、緑も多く、メンテナンスもきちんとしてくれて、遠いのですが、スクールバスで教授たちが多く住んでいる地域のよい小学校に通えるよう、いわば戦略的によくしてあり、ずっと住みよいところです。しかし、それでも最近、半分アフリカ人の血の流れている息子が私の身長を越して、子供から大人の体格になってくるにつれて、以前は考えたこともなかった不安が私の中に募ってきました。というのは、警察の存在です。大都市との比較の上では数少ないですが、やはり、こちら側の地域は盗みや銃犯罪がときおりあることで知られており、警察のパトカーがよくうちのアパートの敷地内でパトロールをしています。ありがたい反面、大切な息子が何かの拍子で誤解され、連れて行かれはしないか、と時折ナーバスな気持ちにおそわれます。

先月 (8 月) にはフロリダの黒人の高校生、トレイボン・マーティンの殺害に関するジョージ・ジーママンの無罪判決が問題になりましたが、これに関連して、合衆国の銃犯罪の犠牲者に黒人が異常に多いというレポートがあります。ある統計によると、合衆国では 28 時間に 1 人、黒人が警察、警備、自警主義者 (*vigilante*) による *extrajudicial killing* (法的に認められない殺害、裁判なしの殺害) で殺されているそうです。しかし、その犠牲者の内実際に犯罪を犯したものはわずか 13 パーセントにすぎないのです。² この件に関しては、最近ノーム・チョムスキーも推薦しているミシェル・アレクサンダー (*Michelle Alexander*) の著書、*The New Jim Crow: The Mass Incarceration in the Age of Colorblindness* (2012 年) (『ニュー・ジム・クロウ：カラー・ブラインドネスの時代の大量投獄—奴隷制から監獄制度へ』) でも詳しく分析されています。³ マヤ・アンジェロウなどが精力的に取り組んできた現在のプリズン・インダストリアル・コンプレッ

クス(prison industrial complex)の問題をさらに取り上げ、それが米国の過去の奴隷制、それ以後のジム・クロー時代のシェア・クロッピング（元奴隷が小作農として地主から土地を借り、生活必需品と引き換えに農作物の半分を渡す制度）や人種隔離政策による当時の労働力の搾取の状態、また人種的な内容と変わっていないどころか、実際に今現在もっとひどくなってきている、とアレクサンダー氏は記しています。コーネル大学のアフリカーナ学部でも、キャロル・ボイス・デイヴィス(Carole Elizabeth Boyce-Davies)教授がこの著書を積極的に取り上げ、先学期（2013年春学期）にはこの問題に関して特別な短期セミナーをコーネルキャンパスのアフリカーナ・センターで行われました。

これまで女手一つで手塩に掛けて育ててきた私の息子はジュニア・アナー・ソサイエティ(Junior Honor Society)のメンバーで、学校の吹奏楽部のトロンボーン第一奏者などをこなし、親バカと言われるかもしれませんが、いわゆる優等生です。それなのに去年、——ちょっと私的なことで恐縮ですが——今通っている中学校で一度一日イン・スクール・サスペンション（学校内謹慎）をくらったことがあります。スクールバスを待っているときに鬼ごっこをしていて、その際に近所の女の子のグループに蹴飛ばされて泣かされていたのを、学校の先生に聞かれ、どういうわけか、その暴力を振るった女の子たちと（泣かされたのに？）一緒に停学にされました。鬼ごっこに参加していたこと自体が原因のようですが、他に参加していた男の子たちもいました（その子たちについては息子も女の子たちもだんまりを決め込んでいたようです）。特に私のほうから、前々から黒人の子供として、問題児として学校システムの中でマークされないように、命に危険がない限り殴られても殴り返さないようにとやってあったのを守り、やりかえせずにくやしくて泣いていたら、そのような処罰を受けたのです。私はそのとき、住んでいる地域が違い、息子が白人であったなら、このような取り扱いをいとも簡単に受けたのだろうか、疑問に思いました。

イサカから車で南東4時間のニューヨーク・シティでの悪名高いマイノリティをターゲットにした警察の「ストップ・アンド・フリスク」(Stop and Frisk)プログラムも警察の理不尽な暴力に対する不安をあおるものですが、もっとひどいのが、テキサスなどの南部の州のいわゆる「学校から刑務所へのパイプライン(school-to-prison pipeline)」で、学校で小・中学生がちょっとした遊び場でのケンカや反抗的な態度で警察官に違反切符をもらったり、罰金を科せられたり、挙句の果てには逮捕されたりして、こういった子供のときのちょっとした行動が犯罪歴として記録されていきます。逮捕されるのは黒人やラティーノなど有色人種の子供が過半数で、人種的な側面が重要な特徴のひとつです。

暴力をふるった女の子たちは3日間の学校外での停学（つまり、自宅謹慎・停学）をくらいましたが、大体、スクールバスの到着が毎日30分ほどほぼ確実に指定時刻より遅く、大人の目もなく、20人ぐらいのアパートの子供たちがずっとひとところ待っていることなどが、問題の起こる状況を作り出していると思われます。しかも、処罰を課したのがアフリカン・アメリカンの女性の副校長であることなど、事情は複雑です。彼女にバスの遅れのことや処罰の不当性を申し立てたのですが、処分は変わらず、私としてはいまだに不満が残ります。イサカでは私たちが越してきた10年前には、ほとんどアフリカン・アメリカンの公立学校の教員はいなかったのですが、当然のことながら、そのことに関して昔から批判があり、それが効を奏してか、彼女のような

存在がここ数年ちらほらと見られるようになってきました。喜ばしい反面、実際にこのような状況に会うと、一体何が変わったのだろうと考えざるを得ません。

先日、コーネル・ウェスト教授が8月28日のワシントンDCにおけるマーチ・オブ・ワシントンの50周年記念の祭典に関するインタビューで、キング牧師のスピーチと同日・同時刻に演出されたオバマ大統領のスピーチの内容を批判し、こじつけにしか見えない化学兵器使用を口実としてシリアを爆撃する準備段階に入った同政権を「オバマ・プランテーション」と一括されていましたが、^{4,5}それを私はなんとも複雑な気持ちで見守っていました。ギャバン・マックコーマック (Gavan McCormack) の著書、*Client State*(2007年)(『依存・従属国家』) というものがありますが、まさにそのクライアント・ステートである日本の自民党安倍政権も、ずさんな処理のために福島原発が未だに危機的状況にあるにもかかわらず原発稼働を推進し、その他にもTPP、歳入が大企業に還元される消費税法案、平和憲法を危機に貶める憲法改正ならぬ改悪法案、また、国民に内密でこっそり国会に提出された秘密保護法案を推し進めるなどと実にカラフルな——そして、率直にいわせていただくと——非常識極まりないと考えますが、黒人研究会の皆様はアフリカーナの世界の歴史研究と照らし合わせて、日本の現実をどのような気持ちで見守っていらっしゃるのでしょうか。いつか皆様からお話をうかがえたらいいな、と切に願っております。

読んでくださって誠にありがとうございました。

2013年9月14日 イサカにて

注

1 “10 Most Livable Cities #8, Ithaca, N.Y.” MSN Real Estate, August, 2013.

<http://realestate.msn.com/10-most-livable-cities-of-2013#4>

2 “Every 28 Hours 2012 Report: Extrajudicial Killings of 313 Black People by Police, Security Guards, and Vigilantes” The Real News, April 21, 2013.

“http://therealnews.com/t2/index.php?option=com_content&task=view&id=31&Itemid=74&jumival=10065”

3 この著書の詳しい情報に関しては公式のウェブサイトをご覧ください。書評、著者のツイッターへのリンク、抗議運動の情報などへのリンクが載っています。

<http://newjimcrow.com>

4 ブラック・レフトの観点から長年にわたって人々に問題を提議している Black Agenda Report がオバマ政権についての批判的な、実に妥当な論説を掲載しています。興味がある方々はウェブサイトをご参考になさってください。

<http://www.blackagenda.com>

5 “Cornel West Says Civil Rights Leaders Have Failed the Movement” The Real News, August 27, 2013

http://therealnews.com/t2/index.php?option=com_content&task=view&id=31&Itemid=74&jumival=10625

入 会 者

伊勢村 定雄（いせむら さだお）氏

所属：東洋大学 非常勤講師

自己紹介：現在、主に研究分野としているのは、アメリカ演劇の中でも、特にアフリカン・アメリカンの劇作家 August Wilson です。彼の芝居に見られる、伝承、伝説などが、どうその一連の作品群の中で登場人物の成立に影響を与えて行ったのかという問題を解明することに力を注ぎたいと思っています。

今後の研究の展望としては、アフリカン・アメリカンの芝居がアメリカの地でどのように発展してきたのかについて、概観し、その中で、August Wilson の位置づけはどのようなのかについて自分なりの答えを出すことです。資料は多少は集ったので、これからそれに目を通して、考察を深めて行きたいと考えているところです。

また、黒人文学については、聞き慣れないことなどがたくさんあり、色々な初歩的質問で皆様にご迷惑をかけるかもしれませんが、その折はご容赦ください。

以上、よろしくお願いいたします。

隠岐 尚子（おき しょうこ）氏

所属：近畿大学 非常勤講師

自己紹介：現在、近畿大学と神戸松蔭女子学院大学で非常勤講師をしております。トニ・モリスンを中心に研究しておりますが、他作家についても幅広く知識を広げられたらと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

丹野 由貴（たんの ゆき）氏

所属：青山学院大学（院）文学研究科 英米文学専攻 前期課程

自己紹介：会社員生活が十数年を越した頃、「この先をどうやって過ごそう」と自問する機会がありました。もともと英米文学科出身で、働きながらも趣味の範囲であらゆる作品に触れていましたが、そんな折、もっと追求したくなったのが黒人文学であり、それが方向転換の契機でした。ただ自分がなぜこの分野に関心を持つのかわからず、大学に再入学してからはその動機を明確にしようと懸命だったのを、今でもよく覚えています。その後、動機は（無事）見付き、現在それが研究への原動力となっています。詳細は皆様とお会いしたときにお話しできれば嬉しいです。目下ジェームズ・ボールドウィンについて修論執筆中。

編集後記

会報作成にあたり、「会員からの投稿」欄に自由なテーマで書いていただく以外、時折あるテーマを決めて、適当な方に投稿をお願いしている。今回は、木内先生のアドバイスを頂いて、「海外在住会員からの便り」ということで、「500 字程度でもいいので、日常的な事を書いていただきたい」と3名の方に依頼した。送付いただいた文章を拝読し、現地生活者でなければ分からない貴重な体験談ばかりに驚き、胸の痛くなる思いをした。内2名の方はアメリカの現状報告であったが、折しも、今年8月にキング牧師が「私には夢がある」と演説したワシントン大行進から50周年を迎えた。あれから黒人問題は、はっきりと目に見えるものから、表立っては見えにくいものに形を変えて存続しているようである。オバマ氏が大統領に就任したとき、「黒人問題は終わった」と言い放った友人がいた。一人のアフリカン・アメリカンが国のリーダーとなっても、一朝一夕にすべての問題が「終わった」と言える状態になるはずもない。編集しながら、研究に多少なりとも関わる人間として、アップ・トゥ・デートな情報を知ることの大切さを今更ながら痛感した次第である。

(井上 怜美)

＜編集＞ 黒人研究会・編集部
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学国際関係学部・加藤恒彦研究室気付

＜編集者＞ 井上 怜美

ホーム・ページアドレス
<http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/>